

經典餘師

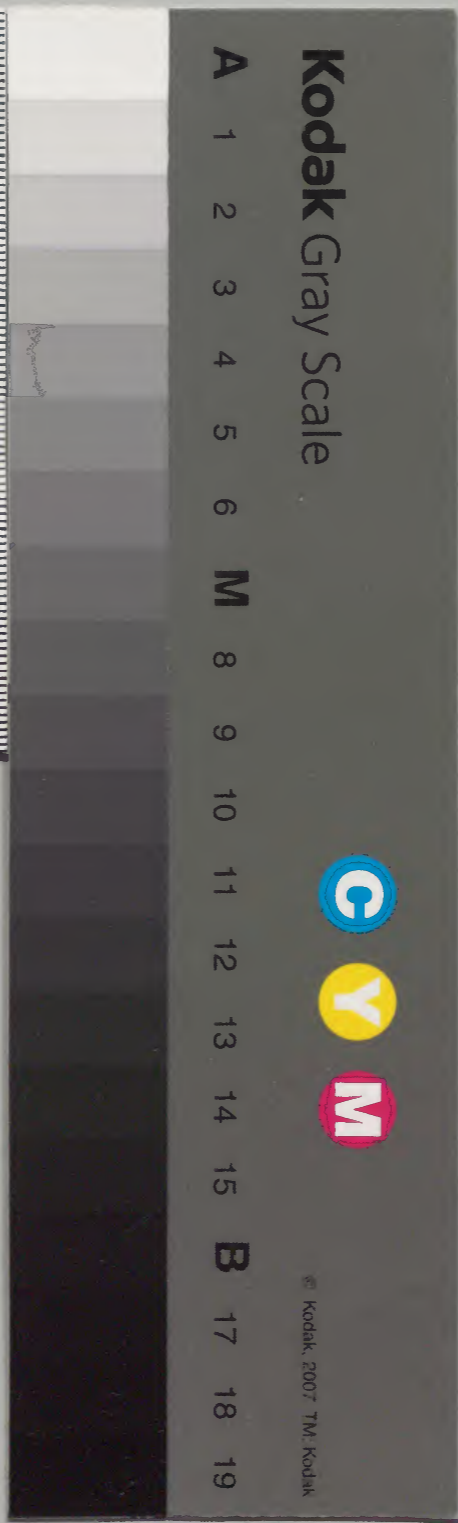
小學之部

四

和書門			
八	六	三	號
六	七	函	類
五	二	冊	架

內閣文庫		
九	八	和
函	六	書
二	三	號
三	五	冊
架	冊	架

內閣文庫	
番號	和 8630
冊數	5 (4)
函號	191 345



小學卷之七

小學卷之七

明治十三年 臘末

董仲舒曰。仁人者其誼と

計不其道と
明其功
と計不

董仲舒曰。仁人者正其誼不謀其利

明其道不計其功漢の代の太儒董仲舒の語かり、仁人とは本心の徳の全完人といふなり、今時君への官役家の

の徳の全完人といふなり、今時君への官役家の

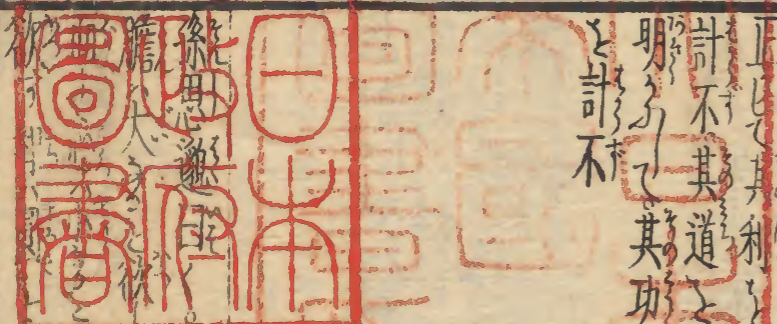
にあり、交際の道に心を置く、利欲心にあり、引きまわす、身を正して身の舉動

の道に心を置く、利欲心にあり、引きまわす、身を正して身の舉動

の道に心を置く、利欲心にあり、引きまわす、身を正して身の舉動

孫思邈曰。膽欲大而心欲小。智欲

圓而行欲方孫子邈は唐の代の大醫なり、人の心切といふ心



孫思邈曰

孫子邈

欲して而して行
ハガリと欲ス

欲して而して行ハガリと欲ス
行ハガリと欲スハガリと欲スハガリと欲ス
行ハガリと欲スハガリと欲スハガリと欲ス
行ハガリと欲スハガリと欲スハガリと欲ス

古語に云く善
に從へば善
如く惡に從へば
崩

古語に云く善に從へば善如く惡に從へば崩
古語に云く善に從へば善如く惡に從へば崩
古語に云く善に從へば善如く惡に從へば崩

孝友先生朱
仁軌隱居
親と養ふ嘗
て子弟に誨
て曰終身路と
讓

孝友先生朱仁軌隱居養親嘗誨子弟曰終身路不枉百步終身讓

枉不終身畔
と讓と一段
と知ハ不

枉不終身畔と讓と一段と知ハ不

濂溪周先生曰
賢ハ聖と希士
賢ハ大賢也伊
尹ハ其君堯舜
爲不夫也其
所不夫也其
顔淵ハ怒と遷

濂溪周先生曰聖希天賢希聖士
希賢伊尹顔淵大賢也伊尹耻其君
不爲堯舜一夫不得其所若撻於市
顔淵不遷怒不貳過三月不違仁

顔淵ハ怒と遷

顔淵ハ怒と遷

不遇と或ば
不三月仁に
違不於

伊尹之志
所に志心
之學所
過ハ則ち聖及
則ち賢及不
失亦令名と
失亦不聖人
道車に入心
存之と蘊
德行と為之

行ハ事業と為
彼文辭已と以
てす者ハ陋
於平而美助字也

仲由過ちを聞
と喜んで令名
窮り無今の人
過ち有人の規
と喜び不疾と
護て而して醫と
思が如し寧其六
身と滅して而
て悟く無噫
馬也
明道先生曰
く聖賢の

常の諸士ハ賢人そふみゆへとやかりたらく伊尹
顔淵ハ大賢人なり伊尹の心そふ常に君とい
の民一人として不得の所あれば五政道のゆとく
又顔子の法を正すふハ嚴重にいりて別事
志伊
尹之所志學顔淵之所學過則聖及
則賢不及則亦不失於令名聖人之
道入乎耳存乎心蘊之為德行行之
為事業彼以文辭而已者陋矣

一賢人と心にふくむ萬一過せば聖とかり及ぶ賢
とより不及たりも令名をばうりて聖人の道
といは蘊へとてせば行に徳の光ありて施して事の
業より學問とがして文辭のふれにかりおとるふハ
陋き學問と
とる

○仲由喜聞過令名無窮焉今人有
過不喜人規如護疾而忘醫寧滅其
身而無悟也噫
聖人の御門人として仲由
吾悦人かりと依てその令名今につとく窮
かり今の人ハ人より思のあれはつとくひとる
たらくハ疾ありりやかく醫師とたふふに
滅口とて悟えぬとふりのこ
○明道先生曰聖賢千言萬語只是

言萬語の人は是
 人己に放之心
 と釋之を約
 して反復と身
 に入來らん欲
 自ら能向上
 尋去下學し
 而して上達
 也心の腔子裏
 に在と要す

欲人將已放之心約之使反復入身
 來 聖人賢者むすばりて、教訓を盡し、
 人己に放之心と約するを、人の心は義理の
 道に在りて、自ら能く向上するを、自ら能く
 尋去下學し、而して上達するを、
下學而上達也、心要在腔子裏、
 人の心は腔子裏に在り、
 腔子の行事とは、道を盡したる、夫れ天理の高
 下極べし、是と下と學して上へ通達するは、
 特、躬の行事とは、深くかたむき、
 の場へ入り、廣くおぼえ、下より上へ入る、
 は、是なりたる、所要、人の心は腔子裏に在りて、
 夫れ、心と、腔子と、忠信の重なる、心の主と、
 うる、夫れ、
 うる、夫れ、

伊川先生曰く、
 只整齊嚴肅
 されば、則ち心便
 ちなり。一ざれば
 則ち自う非辟
 之于無

○伊川先生曰、只整齊嚴肅則心便
 一則自無非辟之干
 一則自無非辟之干、
 一、
 一、
 一、

伊川先生曰、
 表記の君子、
 敬うれば、日に彊
 安肆かれ、日に
 偷う之語と愛
 蓋常人之情、
 纔に放肆すれば、
 則ち日に曠蕩、
 而就自ら檢束

○伊川先生甚愛表記君子、
 敬うれば、日に彊
 安肆かれ、日に
 偷う之語と愛
 蓋常人之情、
 纔に放肆すれば、
 則ち日に曠蕩、
 而就自ら檢束

規矩に就つて

規矩に就つて、又また心こころを檢束けんそくせよ、人ひと於お外物げいぶつ奉身ほうしん

人外物身げいぶつしんと奉ほうずる者ものに於おて事こと

者もの事事じじ要好よす、只有ただ自家じか一箇いつくわん身しん與あ心こころ

事こと好よすと要よすす、只ただ自家じか一箇いつくわんの身しん

却かえ不要よす好よす、苟なほ得え外物げいぶつ好よす時とき却かえ不し知し道みち

自家じか一箇いつくわんの身しん、心こころ與あ有あ、却かえて好よすと要よすせ不し

自家身じかみ與あ心こころ已ま自みづか先ま不し好よす了し也なり、人ひと於お外物げいぶつ奉身ほうしん

苟なほ外物げいぶつ好よすと得え時とき却かえて知し道みちせ

衣服いふく居い處ち等ら、身みの奉養ほうやうとせらる外ほかの事ことは、物もののやうに人情にんじやうとてその事こと々の好よすと要よすす、

不自家ふじかの身みと心こころ與あ、已まに自みづから先ま好よす不しして、

衣い居い處ち等ら、身みの奉養ほうやうとせらる外ほかの事ことは、物もののやうに人情にんじやうとてその事こと々の好よすと要よすす、

先ま好よす不しして、

外物げいぶつの好よすと要よすす、

伊川先生いせんせい曰い、顔淵げんえん問と、克かつ已お復かへ禮れい之を、

○伊川先生いせんせい曰い、顔淵げんえん問と、克かつ已お復かへ禮れい之を、

禮れいに非あらず視み、

目め孔子こうし曰い、非あら禮れい勿な視み、非あら禮れい勿な聽き、非あら禮れい

勿な言い、非あら禮れい勿な動うご、

勿な言い、非あら禮れい勿な動うご、

聽き、勿な言い、非あら禮れい勿な動うご、

重おもく、非あら禮れい勿な動うご、

四よの者もの、身み之の用もち也なり、

乎こ外げ制せい乎こ外げ、所以ゆゑ養やしな其中そのちゆう也なり、

而しか外げに應おず、

乎こ外げ制せい乎こ外げ、所以ゆゑ養やしな其中そのちゆう也なり、

中ちゆうと養やしな、所以ゆゑ也なり、

斯こ語ご、所以ゆゑ進すす於お聖人せいじん、後のち之の學まな聖人せいじん者なり、

顔淵げんえん斯こ語ごと事こと、

宜よろ服はく膺おう而しか勿な失し也なり、

所以ゆゑ也なり、後のち之の學まな聖人せいじん者なり、

右みぎの四よヶ茶ちやハ身みの用もち也なり、

聖人と學ぶ者。宜く服膺して而して生ずる勿く宜也。因箴以自警。其視箴に曰く。心本虚。物に應じて迹無之。操に要有。視之。則と爲前。其中則遷。制之於外。以安其内。克己復禮。久而誠矣。

中に在るに由て外のものに應じて... 正に九に制するより、顔子の... 常に事として... 聖人の... 因箴以自警其視箴曰心兮本虚應物無迹操之有要視爲之則蔽交於前其中則遷制之於外以安其内克己復禮久而誠矣

其聽箴に曰く。人の秉彜有と天性に本づく知誘物に化し。遂に其止まると卓たる彼先覺止と知て定る。有邪を閑誠と存す。禮に非れは聽く勿乎。

其聽箴曰人有秉彜本乎天性知誘物化遂亡其正卓彼先覺知止有定閑邪存誠非禮勿聽

其言箴曰人心動因言

言に因て以て
宣發に躁妄と
禁ずれば内斯に
靜專かり然是
福慶して或は
興一好と出
吉辭榮辱惟
其召所召に
傷ハ則誠煩に
傷とてハ則支
己肆すかれ
物忤ひ出
情れ來て違
法に非れハ道
不欽武訓辭
其動箴に用
哲人ハ機と知
て之を思心

以宣發禁躁妄内斯靜專矧是樞機
興戎出好吉凶榮辱惟其所召傷易
則誕傷煩則支己肆物忤出悖來違
非法不道欽哉訓辭人の心の動ハ言に
よりとまり、言と發てハ躁妄と禁むべし專一心
とてめて心と安靜べく誠は善惡の極なり
あるハ是より戒めしむべしハ好とむハ士も
四と榮と辱と終ハ言ハり言ハるもの易言とせ
誠にかり煩言とせハ支己肆すれハ理に違
するものなりハ則支己肆すれハ理に違
すべし非道とせハ道
其動箴に用
哲人ハ機と知
て之を思心

誠に志士
ハ行を勵
之を勵に守
理に順應
裕からず
惟危一造次
克念戰兢
自持存性
成聖賢歸
同入

於為順理則裕從欲惟危造次克念
戰兢自持習與性成聖賢同歸身の
知て誠に思慮とふくはつとせり立あり
士ハ勵行邁とて義理と守りてその
心も裕なり
性實のこゝにかりて聖賢
歸趣とせり

伊川先生言
人三不幸有
少年登一高
科一不幸有
席父兄之勢
為美官一
不幸有
高才能文章
三不幸也

○伊川先生言人有三不幸少年登
高科一不幸有席父兄之勢為美官一
不幸有高才能文章三不幸也人に

伊川先生言
人三不幸有
少年登一高
科一不幸有
席父兄之勢
為美官一
不幸有
高才能文章
三不幸也

と悪不也
 呂榮公嘗言
 後生の初學
 且須氣象
 と理會す須
 氣象好時百
 事是當氣象
 者辭令容止
 輕重疾徐以
 て志と見え
 足り惟君子
 小人此に於て
 必に不亦
 貴賤壽夭之
 由是定所也
 須に度矣焉

○呂榮公嘗言後生初學且須理會
 氣象氣象好時百事是當氣象者辭
 令容止輕重疾徐足以見之矣不惟
 君子小人於此焉分亦貴賤壽夭之
 所由定也

夫君子と云ふは、氣象のさうりやうなれば、百事の
 道理に當べし、その氣象の工夫の場と云ふは
 辭令容止と云ふは、輕重と事の徐疾なり、心
 づまひ、君子と小人と貴と賤と壽夭と夫死を
 せ、つらるべしと云ふは、中つと、麻子のどと人々夫
 死われし、天命の外の多右の理と云ふは、つらり
 生質の宜き人々氣象の

其惡と攻て
 人之惡と
 無蓋自其
 惡と攻て
 夜且自點檢
 絲毫と盡
 不ば則心に
 歎なり豈工
 夫他人と點
 檢すると有ん
 耶
 大要前輩事
 と作と多ハ
 周詳なり後
 輩事と作と
 多ハ闕畧と
 恩讎分明此
 四字有道者

攻其惡無攻人之惡蓋自攻其惡日
 夜且自點檢絲毫不盡則歎於心矣
 豈有工夫點檢他人耶

○大要前輩作事多周詳後輩作事
 多闕畧

○恩讎分明此四字非有道者之言

之言に非ざる也
也好人無の
三字有德者
之言に非ざる
也後生之と
戒め

張思叔座右の
銘に曰凡語
に必ず忠信に
凡行に必ず篤
敬に飲食に必
す慎節に字畫
必ず楷正に容
貌に必ず端莊
に衣冠に必ず
肅整に步履
必ず安詳に

居處必ず正
靜に事と作
に必ず始に謀
言と出ると必
ず行と饒と
常德ハ必ず固
持然して諾必
ず重應善と
見てハ已出と如
惡と見てハ己
病が如し凡此
十四の者我皆
未深省と未
此と當座の
隅に書て朝夕
に視て教言と為
戒め

也無好人三字非有德者之言也後

生戒之世のつひはさへか思ある人ふんきつと思と

以て報へり、離れる人ふんきつと思と報へり、
その所と形明なるべしと心ねてまらぬ語りけりて
違有人の言かあつし思ある人ふんきつと思と
報へり、又人ふ我に惡かりとて我ハ正言と
以て相接べしとも聖人ハ正言と又人の詞に
凡て世の中ハ表面ハよくつ内心好人ハよく
無とつものありおれなく徳と有ける人の言ハあ
つてて已ガ身實に正とせん人ハ正とせん
にあつる己ハ心正とせん善とせん人ハ善とせん
すや、後世ふんきつと思と戒め

○張思叔座右銘曰凡語必忠信凡

行必篤敬飲食必慎節字畫必楷正

容貌必端莊衣冠必肅整步履必安

詳居處必正靜作事必謀始出言必

顧行常德必固持然諾必重應見善

如己出見惡如己病凡此十四者我

皆未深省書此當座隅朝夕視為警

張思叔ハ程子の門人なり、常に座の右に題
と記して戒めとせん、その條といふハ言ハ
忠と信と、行ハ篤と、敬ハ慎と、字畫ハ楷と、
容貌ハ端莊と、衣冠ハ肅整と、步履ハ安詳と、
作事ハ謀始と、出言ハ顧行と、常德ハ固持と、
然諾ハ重應と、見善ハ如己と、見惡ハ如己と、
病ハ凡此と、十四の者我皆未深省と、未深省と、
此と當座の隅に書て朝夕に視て教言と為戒め

胡文定公曰人須是一切の世味淡

○胡文定公曰人須是一切世味淡

好須富貴相有之と要

薄方好不要有富貴相人々一切世の味

孟子謂堂高數仞

孟子謂堂高數仞

食前方丈侍妾數百人

食前方丈侍妾數百人我得志不為

學者須先除去此等常自激昂

學者須先除去此等常自激昂便不

到得墜墮

到得墜墮孟子居處食物と方丈に引さ

常愛諸葛孔明

常愛諸葛孔明

明當漢末躬耕南陽不求聞達

明當漢末躬耕南陽不求聞達後來

雖應劉先主之聘宰割山河三分天

雖應劉先主之聘宰割山河三分天

下身都將相手握重兵亦何求不得

下身都將相手握重兵亦何求不得

何欲不遂乃與後主言成都府樂八

何欲不遂乃與後主言成都府樂八

百株薄田十五

百株薄田十五

長尺寸若死之日不使廩有餘粟庫

長尺寸若死之日不使廩有餘粟庫

經典餘師

經典餘師

項有子孫の衣食自給す跡無有臣身外に在りて別に調度無

有餘財以負陛下乃卒果如其言如此輩人真可謂大丈夫矣孔明諸葛公南陽といふ

別に生るるを以て尺寸を長

併にたぐい後に劉皇叔の聘に應て天下を宰割て軍兵を握司將相職あり

不死する之日の

天子にのめのみ成都の郡に桑の木八百株あり又薄田十五頃あり子孫のくわん鏡なり

有庫に餘財有

臣ハ外に出づつらあられ別にいさむを調度る

負不奉に及て

く尺寸をりも入用ならずたぐ死するともたぐの粟財ハありざるべし子孫に不足とて

此の如輩の人

況陛下に負るるのやうめんとなり果して孔明の語のびくやうし真に大丈夫といふべし

真に大丈夫と謂

べし五語のこの事と愛

つ可矣

とるぞと伊川先生のあや

○范益謙座右戒曰一不言朝廷利

利害邊報の

言邊報差除二不言州縣官負長短

差除と云言不

得失三不言衆人所作過惡四不言

二州縣の

仕進官職趨時附勢五不言財利多

官負の長短

少厭貧求富六不言淫媒戲慢評論

得失と云言不

女色七不言求覓人物八索酒食

三衆人の

謙といつる人此言ハ口外に出すナド慎しく言

作所の過惡

の朝廷にあらざる又ハ邊報差除等の事なり

言不四言言

二州縣の官負の長短得失の

職に仕進する

すて人の過惡四言時の勢門ありて官に進

に時に趨勢に

評論する言

附と云言不

女色の評ハ心も禮法もろくなく七人

五財利の

不七人人物

多少貧を厭

不六淫媒

富と求を言

戲慢一女色と

と求覓し酒の物と云ふつげ、その品を覓求又ハ食物の又

食と干索する品をも索す癖あるのたぐひ言はずんたぐひ

又日く一ノ人書信と附し開拆

沈滞不可不

二ノ人與人並坐して人の私書

三ノ人凡人の家に入て人の文章

と看不可不四

五ノ人凡の物を借損壞し還不

六ノ人凡飲食と喫せ

七ノ人凡飲食と喫せ

八ノ人凡飲食と喫せ

九ノ人凡飲食と喫せ

十ノ人凡飲食と喫せ

又

曰一人附書信不可開拆沈滞二與

人並坐不可窺人私書三凡入人家

不可看人文字四凡借人物不可損

壞不還五凡喫飲食不可揀擇去取

六與人同處不可自擇便利七見人

富貴不可嘆羨詆毀凡此數事有犯

之者足以見用意之不肖於存心脩

身大有所害因書以自警

人の書信と附託して沈滞り又ハ折開する事

サリニノ人の私書とつづき言はずんたぐひ

のりあつて人の文字ヲやめても見まじ、四ノ借

り此ハ損壞する事也、五ノ他家にて喫物とれ

これと可ハ揀擇し、否ハする事ハ、六ノ借

し同席せしめられの便利とされむと、七ノ人の

富と羨し又ハ詆毀の事ハ、憤り、犯者

ハこれれれ用意の不肖カあるもの、身の脩

に害あり候てみづる

敬言むらむれやうとぞ

胡子曰今之儒者移學文藝于仕

進之心以收其放心而美其身則何

古人之不可及哉父兄以文藝令其

子弟朋友以仕進相招往而不返則

子

古人の文藝を以て其子弟に令て朋友仕進を以て相招往て而して返不ば則心始て荒で而して治め不萬事之成不咸古先に速不

心始荒而不治萬事之成咸不逮古

先矣當今の學者文藝を以て仕進を干るるに達し心を收

て不放たんと古人も及べり父兄も文藝のよれと申つけて身と修るの工夫なく朋友もたがいに仕進のすべりありて招あふのよく身に不返すは後々の心も荒て萬事古先の人々に

○顏氏家訓曰夫所以讀書學問本

欲開心明目利於行耳讀書學問といふ所必ハ外あても

養親者欲其觀古人之先意承顏怡

聲下氣不憚劬勞以致甘腴煬然惕

然慚懼起而行之也親につらなりければ古人の顔色

未知事君者欲其觀古人之

守職無侵見危授命不忘誠諫以利

社稷惻然自念思欲効之也君につらければ古人

素驕奢者欲其觀古

人之恭儉節用卑以自牧禮為教本

素驕奢者欲其觀古

人之恭儉節用卑以自牧禮為教本

人之恭儉節用卑以自牧禮為教本

劬勞と憚不し以て甘腴と致し觀煬然と慚懼起て之れと行んと欲也未知事君者欲其觀古人之職を守りて見て命を授け誠諫を忘不し以社稷を利するを觀し惻然として自念し思て之に効んと欲すも欲也素驕奢者欲其觀古人之

顏氏家訓に曰く精讀書學問する所謂ハ本心を開き目と明し行に利ありと欲す耳未親と養ふこと未知事君者古人之意に承て怡々しく勉勞と憚り食物の甘腴とすべし古人に慚懼てさうに地をまん起べし未知事君者欲其觀古人之守職無侵見危授命不忘誠諫以利社稷惻然自念思欲効之也君につらければ古人の顔色を觀し自念し思て之に効んと欲す素驕奢者欲其觀古人之恭儉節用卑以自牧禮為教本

恭儉以用財と
節以用財と
自牧と
の本為の敬者身
の基を以て觀て
聖然として自失し
容と斂志と
抑と欲也

素より鄙悒なる
者其古人の
義と貴と財と輕
ト私欲と多と慾
寡と盈と息心
滿と惡と好と
開置きと恤と
觀て赫然として
悔耻積而能
散ると欲也

素より暴悍なる
者其古人の
心と小じと黜
齒漱舌存含垢
と含疾と藏
賢と尊衆と容と
觀て赫然として沮喪
衣に勝不若き
と欲する也
素より怯懦なる者
其古人の生に
達命に未だ強毅正
直にして言と立て
必す信福と求て
回不と觀勃然と
奮厲と恐懼
不可不と欲也
茲と歷て以往
百行皆然縱

敬者身基瞿然自失斂容抑志也奢驕

素鄙悒者欲其

觀古人之貴義輕財少私寡慾忌盈

惡滿則窮恤匱赧然悔耻積而能散

也私欲多と慾寡と息心滿と惡と好と開置きと恤と觀て赫然として悔耻積而能散ると欲也

素暴悍者欲其觀古人之小心黜已

齒漱舌存含垢藏疾尊賢容衆茶然

沮喪若不胜衣也又暴悍の古人の心と黜齒漱舌存含垢と含疾と藏賢と尊衆と容と觀て赫然として沮喪衣に勝不若きと欲する也

素怯懦者

欲其觀古人之達命委命強毅正直

立言必信求福不回勃然奮厲不可

恐懼也怯懦の古人の天命生死の道と立言必信求福と不回勃然と奮厲と不可不と欲也

歷茲以往百行皆然

經典餘師
小學卷之七
七四

淳と去甚と能く
 去之と學で知
 所施て達不
 書と讀て但能
 之と言ふ之と
 行能不武
 人俗吏共に
 嗤誥せ所
 良に是に由耳
 又數十卷の
 書と讀て便
 自高大の長
 者と凌か心
 同列と輕慢
 有人之疾と
 讎敵の如くと

縱不能淳去甚學之所知施無
 不達世人讀書但能言之不能行之
 武人俗吏所共嗤誥良由是耳
 又有讀數十卷書便自
 高大凌忽長者輕慢同列人疾之如
 讎敵惡之如鴟梟如此以學求益今
 反自損不如無學也

惡く鴟梟の
 如此の如く學
 と以て益と求
 て今反て自損
 す學無に如不也
 伊川先生曰
 大學の孔氏之
 遺書あり初學
 德に入るの門也
 今に於て古人學
 と為次第と見
 可者獨此篇
 の存するに賴
 而も其他則
 ち未論孟子如
 者有未故學
 者必ず是に由
 而て學べ則ち

○伊川先生曰大學孔氏之遺書而
 初學入德之門也於今可見古人爲
 學次第者獨賴此篇之存而其他則
 未有如論孟子者故學者必由是而學
 焉則庶乎其不差矣

經史餘論

卷之七

十五

其差不必に慶え

聖人の道に差
ざるべしとぞ

凡語孟と看バ
且須く熟讀
玩味して聖人
之言語と將て
切に切に須

○凡看語孟且須熟讀玩味將聖人
之言語切也不可只作一場話說看
得此二書切已終身儘多也

只一場の
作可不此二書と
看得て切に切
るが身と終心も
多る儘也須

の法は、くろかへ熟讀玩味して、聖人の言
語と一々身に引ぬく深切にふるべし一場
の語説とせんべくべくおれがふの
二の書終射用ふと多るべし

論語と讀者
但弟子の問
處と將て便ら
く問く作聖
人の答處と
將て便ら

○讀論語者但將弟子問處便作已
問將聖人答處便作今日耳聞自然
有得若能於論孟中深求玩味將來

の耳聞と作
自然に得し
有若能論孟の
中に於深求て

涵養成甚生氣質
論語の中と玩味の法は
聖人と御門人の問

玩味セバ將來
涵養して成て
氣質と生え

答と便に己身とく、聖人へたづめらるるに
し、又聖人の御答とらるるに耳聞よくに工夫
するは自然と得道して、自然に氣質の
涵養成るは將來ふあつて自然に氣質の
妙と得べし

横渠先生曰
中庸文字輩
直に須く尅尅

○横渠先生曰中庸文字輩直須尅
尅

理會して過て
其言として互
に相發明セ

尅尅の意とたぐひ理會して互
に相發明して、心と發明して、一巻の
分、道理するは

六經ハ須く循
環して理會す
須く窮無儘自
家一終と長得

○六經須循環理會儘無窮待自家

いと待は別ら
又見得別ら
須二渡

呂舍人の曰く
大抵後生學と
為し先須く學と
為所以の者何事
といふと理會す須

一行一住一語一黙
盡く道理に合は
し須要す學業の
則ら須く是

嚴に課程と
立須一日し
放慢す可ら不
毎日以須く一般

の經書一般の
子書と讀須
須く多る須不
只精熟せ令と
と要ら須二渡

須く靜室に
危坐して讀取
す須く字字句
句分明せん
須要す又毎日
須く前の二五

授と連て通讀
すし五七十遍
成令須一字
放過す可不也
史書の毎日須
く一卷或半卷
以上と讀取す須

以上と讀取す須

以上と讀取す須

以上と讀取す須

以上と讀取す須

以上と讀取す須

長得一格則又見得別今の五經に樂

といふ尤く聖人天下と為りて禮樂の道あり
その理深淵とて依てその道理と循環して

自家一格として又別ら
道理あり

○呂舍人曰大抵後生爲學先須理

會所以爲學者何事一行一住一語

一黙須要盡合道理學業則須是嚴

立課程不可一日放慢毎日須讀一

般經書一般子書不須多只要令精

熟呂舍人曰人の語の後學生は

精熟と簡要とに
須靜室危

坐讀取二三遍字字句句須要分明

又毎日須連前三五授通讀五七十

遍須令成誦不可一字放過也史書

毎日須讀取一卷或半卷以上始見

功さて靜かざる室して危坐し二三百遍

讀べし二三四五日の間師にまら

以上と讀取す須

始て功と見(須)二

須(是)人(に)

從(て)授(讀)一

疑(難)の(處)便

ら(質)問(須)古

の(聖)賢(心)と(用)

こ(し)と(求)て(力)と

竭(て)之(に)從(須)二

夫(指)引(者)師

之(功)也(行)て

至(不)と(有)と

從(容)と(規)戒

する(者)朋(友)之

任(也)意(と)決

而(往)ハ(則)已(力)

と(用)須(他人)に

仰(難)矣(矣)

解(つ)と(毎日)連(つ)て(五六七十)遍(い)て(一)

半(卷)も(放)適(ま)た(な)かり(代)々の(史)書(を)一(卷)

須(是)從(人)授(讀)疑(難)處(便)質(問)求(古)

聖(賢)用(心)竭(力)從(之) 人(に)授(讀)中(に)疑(難)場(所)ハ(き)ろ(と)質(問)

夫(指)引(者)師(之)功(也)行(有)不(至)從(容)

規(戒)者(朋)友(之)任(也)決(意)而(往)則(須)

用(己)力(難)仰(他人)矣 指(引)師(の)功(を)行(ふ)不(至)を

向(と)決(断)し(て)往(む)が(力)と(用)す(と)自(身)に

あ(り)て(他人)に

仰(難)矣

○呂氏童蒙訓曰今日記一事明日

記一事久則自然貫穿今日辨一理

明日辨一理久則自然浹洽今日行

一難事明日行一難事久自然堅固

渙然氷釋怡然理順久自得之非偶然

也 明(日)も(一)段(づ)つ(て)久(し)と(自)然(に)行(ふ)

理(を)貫(穿)手(に)入(り)今(日)一(つ)の(理)と(辨)し(て)明(日)も(一)理(と)辨(む)と(自)然(に)浹(じ)ち(す)

難(行)し(と)も(一)つ(く)行(ふ)何(事)も(日)と(積)む(と)

堅固なるも

呂氏童蒙訓

事と記明日一

事と記久ければ

則自然に貫穿

す今日一理と

辨明日一理と

辨久ければ則自

然に浹洽す今日

日一難事と行ひ

然に堅固なり

渙然と氷釋し

怡然として理順す

前輩嘗說後生性人太過者者畏不足惟書と讀

前日表の氷のびく、渙然と釋す、道理も順に怡然しく手に得るのかり、愜體うんんるもの、偶然に手に入りやうに思ひあやまりかり

○前輩嘗說後生才性過人者不足

畏惟讀書尋思推究者為可畏耳又

云讀書只怕尋思蓋義理精深惟尋

思用意為可以得之鹵莽厭煩者決

無有成之理前輩嘗てもの、ほく、さう、ん、人に過るると畏る、たう、惟、畏、る、さ、い、書、と、讀、て、推、究、尋、思、の、の、れ、な、り、さ、う、や、う、に、勝、た、る、さ、れ、が、さ、う、あ、り、義、理、の、精、深、所、の、意、を、用、さ、る、ふ、く、さ、う、尋、思、の、れ、と、手、に、入、り、中、に、

顏氏家訓曰借人典籍皆須愛護

人、に、過、る、と、畏、る、た、う、惟、畏、る、さ、い、書、と、讀、て、推、究、尋、思、の、の、れ、な、り、さ、う、や、う、に、勝、た、る、さ、れ、が、さ、う、あ、り、義、理、の、精、深、所、の、意、を、用、さ、る、ふ、く、さ、う、尋、思、の、れ、と、手、に、入、り、中、に、

愛護す須先

就、れ、為、に、補、治、す、此、亦、士、大、夫、百、行、之、一、也、濟、陽、の、江、祿、書、と、讀、ま、未、竟、未、急、速、有、雖、心、必、速、卷、束、整、齊、す、る、と、待、て、然、し、て、後、に、起、し、得、故、に、損、敗、無、人、其、求、假、と、厭、不、或、几、案、に、狼、籍、一、部、秩、多、散、す、童、幼、婢、妾、多、ハ、童、幼、婢、妾

就、れ、為、に、補

成、就、の、あ、い、ハ、

治、す、此、亦、士

○顏氏家訓曰借人典籍皆須愛護

大夫百行之

先、有、缺、壞、就、為、補、治、此、亦、士、大、夫、百、行、之、一、也、濟、陽、の、江、祿、書、と、讀、ま、未、竟、未、急、速、有、雖、心、必、速、卷、束、整、齊、す、る、と、待、て、然、し、て、後、に、起、し、得、故、に、損、敗、無、人、其、求、假、と、厭、不、或、几、案、に、狼、籍、一、部、秩、多、散、す、童、幼、婢、妾、多、ハ、童、幼、婢、妾

一也濟陽の

先、有、缺、壞、就、為、補、治、此、亦、士、大、夫、百、行、之、一、也、濟、陽、の、江、祿、書、と、讀、ま、未、竟、未、急、速、有、雖、心、必、速、卷、束、整、齊、す、る、と、待、て、然、し、て、後、に、起、し、得、故、に、損、敗、無、人、其、求、假、と、厭、不、或、几、案、に、狼、籍、一、部、秩、多、散、す、童、幼、婢、妾、多、ハ、童、幼、婢、妾

江祿書と讀

行、之、一、也、濟、陽、の、江、祿、書、と、讀、ま、未、竟、未、急、速、有、雖、心、必、速、卷、束、整、齊、す、る、と、待、て、然、し、て、後、に、起、し、得、故、に、損、敗、無、人、其、求、假、と、厭、不、或、几、案、に、狼、籍、一、部、秩、多、散、す、童、幼、婢、妾、多、ハ、童、幼、婢、妾

未竟未急速

急、速、必、待、卷、束、整、齊、然、後、得、起、故、無、損、敗、人、不、厭、其、求、假、焉、或、有、狼、藉、几、案、分、散、部、秩、多、為、童、幼、婢、妾、所、點、汚、風、雨、蟲、鼠、所、毀、傷、實、為、累、德、吾、每、讀

有雖心必速

案、分、散、部、秩、多、為、童、幼、婢、妾、所、點、汚、風、雨、蟲、鼠、所、毀、傷、實、為、累、德、吾、每、讀

卷束整齊す

風、雨、蟲、鼠、所、毀、傷、實、為、累、德、吾、每、讀

と待て然して

風、雨、蟲、鼠、所、毀、傷、實、為、累、德、吾、每、讀

後に起し得故

風、雨、蟲、鼠、所、毀、傷、實、為、累、德、吾、每、讀

に損敗無人其

風、雨、蟲、鼠、所、毀、傷、實、為、累、德、吾、每、讀

求假と厭不

風、雨、蟲、鼠、所、毀、傷、實、為、累、德、吾、每、讀

經典餘而

小學卷之七

十九

の爲に黜汚せ
所風雨蠱鼠
に毀傷せ所
實に徳と累
すしと爲五
聖人の書と讀
毎に未嘗て肅
敬して之に對せ
不あり未其故
紙の五經の詞
義及聖賢の
姓名を敢て
他に用不也
(未ニ讀焉)

聖人書未嘗不請敬對之其故紙有

五經詞義及聖賢姓名不敢他用也
顔公の傳に人の典籍を借て愛護に
士大夫の躬して百の人の書と讀かり
に江祿とて濟陽の人の書と讀かり
ての速用しとて損敗とて
依て人し求假しとて厭に
て凡案の上に部秩が散狼籍に
幼又ハ婢妾の手に黜汚
うせざる鼠のくみ毀傷られ人徳と累す
く肅敬とく故紙のうらと五經の詞義あ
向の姓名あれ他の用

明道先生曰
君子の人と
教の順序有
先傳に小者
近者といて而
後教に遠者
大といて不
非也

○明道先生曰君子教人有順序先傳
以小者近者而後教以大者遠者非
是先傳以近小而後不教以遠大也

君子の人と教ふるに順序あり教傳するに小者
近き者といて而後教に遠き者といつて
大といて不非也

○明道先生曰道之不明其端害之
也昔之害近而易知今之害深而難
辨昔之惑人也乘其迷暗今之人人
也因其高明自謂之窮神知化而不

難昔之人... 惑乎其迷... 入其高明... 因自之... 窮化之... 而後以... 開務之... 不足... 倫理... 實之... 外之... 窮微... 而之... 舜之道... 不不... 學淺... 固滯

に非... 此に... 明... 邪誕... 詭競... 取之... 塗天... 濁に... 未... 見... 生... 不... 路... 門... と... 後... 可

經典余師

小學卷之二

足以開物成務言為無不周備實則
外於倫理窮深極微而不可以入堯
舜之道天下之學非淺陋固滯則必
入於此白道之不明也邪誕妖妄之
竟競起塗生民之耳目濁天下於汚
濁雖高才明智膠於見聞醉生夢死
不自覺也是皆正路之荆棘聖門之
蔽塞闢之而後可以入道

世の老莊佛者の崇むるの 聖と高明とを害
の用政務... 心と... ける... るく... 妖妄... 眼... 人... の... 右
廣敬身

小學卷之二

...

右敬胤と麿

小學卷之七

二十一

小學卷之七終

小學卷之七終

讀法

小學卷之八
善行第六

小學卷之八

善行第六

古人の行状の善すべしとれと記す

呂榮公名希哲字原明申國正獻公之長子。正獻公居家簡重寡黙。以て心に經不而して申國夫人性嚴。法度有甚。公愛之。雖然。公矩に循蹈。甫十歳。祁寒

呂榮公名希哲字原明申國正獻公之長子。正獻公居家簡重寡黙。以て心に經不而して申國夫人性嚴。法度有甚。公愛之。雖然。公矩に循蹈。甫十歳。祁寒

小學卷之八

小學卷之八

暑雨侍立終日不命之坐不敢坐也
 之に坐と命せず
 不_レ敢坐也
 日に必冠帶して
 以て長者に見ゆ
 平居甚熱と雖
 父母長者之側
 に在て巾襪縛
 袴衣服と去と
 得_レ不唯謹あり
 行歩出入茶肆
 酒肆に入と得
 無_レ市井里
 巷之語鄭衛之
 音未嘗一接於
 耳に經未不正
 之書非禮之色
 未嘗一接於

暑雨侍立終日不命之坐不敢坐也
 日必冠帶以見長者平居雖甚熱在
 父母長者側不得去巾襪縛袴衣服
 唯謹行歩出入無得入茶肆酒肆市
 井里巷之語鄭衛之音未嘗一經於
 耳不正之書非禮之色未嘗一接於
 目依て器業公も十歳ぐいりふ祿寒暑氣の時
 節も衣冠束帶と去し父母長者の前謹
 坐し安坐せし仰せられ坐せりりり勿論巾
 襪縛袴衣服と取去ちりりり行歩出入
 酒肆茶肆にたりりり鄭衛さびる國にたり
 非禮書物又ハ色香にたりりり
 正獻公通判

正獻公穎州通判也歐陽公適州事知州事焦先生千之伯強文忠公の所容とて嚴毅方正也正獻公之と招延して諸子と教使諸生小と過差有ハ先生端坐してカ以て與に相對し終日竟夕之與語不諸生恐懼畏伏して先生方に略辭

正獻公通判
 穎州歐陽公適知州事焦先生千之伯強客文忠公所嚴毅方正正獻公招延之使教諸子諸生小有過差先生端坐召與相對終日竟夕不與之語諸生恐懼畏伏先生方略降辭色時公方十餘歲父正獻公の穎州通判也當時大儒くはまじり歐陽公ありりり國の知事ありりり此家に焦先生と名を千之伯強とて學者寓容せりりり焦先生に嚴重とたせり作法方正く節毅とりりり父正獻公たはく招

名と降時に公
方に十餘歳

内ノ則正獻公

申國夫人與

教訓此の如之

嚴外則焦先

生の化導此の如

之篤あり故に公

德器成就して大

に衆人に異あり

公嘗言人生内

に賢父兄無外

に嚴師友無して

而能成と有

者ハト也

呂榮公の張夫

人ハ待制諱

昂之之幼女也

最鍾愛ナ然

居常微細の

事に至らず之に

延て諸の子弟の教授とすのありきふ諸生
の衆中に義過差するは先生坐と正

しく前座に居せしむ竟夕對坐して言語

アタレも諸生いづれも恐懼畏伏けらる此時先生も

畧く辭色と降げしむ呂榮公もその中に内

則正獻公與申國夫人教訓如此之

嚴外則焦先生化導如此之篤故公

德器成就大異衆人公嘗言人生内

無賢父兄外無嚴師友而能有成者

少矣右のとりに家の内と父母の教訓嚴しく

の德器成就して衆人に異ありしを榮公の

に言やう人の生も内に賢と父と外に嚴と師範

を以て德器と成る

○呂榮公張夫人待制諱昂之之幼

女也最鍾愛然居常至微細事教之

必有法度如飲食之類飯羹許更益

魚肉不更進也時張公已爲待制河

北都轉運使矣呂榮公の夫人張氏は

に張昂之とて待制の官人の幼女也け最

と鐘愛せり之に居常微細の事に法度

となし魚肉の更進と許し儉約とす

奢侈とい及夫人嫁呂氏夫人之母申

及て夫人之母ハ申國夫人の姉也一日來て女之類有と見て大に樂ま不申國夫人に謂曰豈小兒輩私に飲食と作家法と壞使可けん耶其嚴する此の如

唐陽城國子司業と為諸生と引て之に告て曰凡學者

忠と孝與と為と學所也諸生人親と省と不者有乎明日城に謁く還養者二十輩三年歸侍せ不者能ハ之と解

安定先生胡瑗字翼之隋唐以來仕進文辭と尚て而経業と遺苟く禄利に趨

經史、余市

國夫人姉也一日來視女見舍後有

錫釜之類大不樂謂申國夫人曰豈

可使小兒輩私作飲食壞家法耶其

嚴如此元來夫人張氏の舅公ハ榮公の母公の申國夫人の姉君なり張夫人の

の女子のへをとりてけりて不樂げたりて妹公申國夫人にありせありけりて小兒輩の時

私思に飲食のしつてせりて驕奢にまじりて家法とくつらん申されりて嚴し風儀

○唐陽城爲國子司業引諸生

告之曰凡學者所以學爲忠與孝也

諸生有久不省親者乎明日謁城還

養者二十輩有三年不歸侍者斥之

唐の陽城といふ人國子司業とせりて諸生に告やハ學問ハ忠孝の二かりて諸生の久しく留滞せしハ親と省とのかたむふとせりその明日諸生を呼んで謁すとて

郷にありて父母と省養するの二十輩ありて凡て三年をたれども古郷へりて父母に侍るもの追斥

ひん

○安定先生胡瑗字翼之患隋唐以

來仕進尚文辭而遺經業苟趨禄利

及爲蘇湖二州教授嚴條約以身先

經史、余市

患獲湖二州の
 教授と為に及
 で條約と嚴に
 先づ大暑と雖
 必公服終日
 諸生に見て師
 弟子之禮と嚴
 有に至て解經
 して諸生の為
 に其しとて而
 而後人治
 所以の者言
 學徒千數日
 月刮削文章
 と為皆經義

之雖大暑必公服終日以見諸生嚴
 師弟子之禮解經至有要義悵悵為
 諸生言其所以治已而後治乎人者
宋の胡瑗字翼之とて大儒なり、安定元生と
 隋唐の代り官に仕進する文辭となく
 に作るを尚て經學と遺やりにするも憂まん
 嚴く法度と約束しく、我身と先へ嚴重にか
 子禮と行ひ、經書の肝要なる所にこれ悵
 細に治すといふ所以なり
 學徒千數日月刮
 削為文章皆傳經義必以理勝信其

に傳必其理の
 勝ると以て其師
 説を信じて執行
 實と尚後大
 學と為四方之
 に歸て庠舎容
 不能不
 其湖學に在
 事齋と置經義
 齋者疏通の
 器局有者と擇
 て之に居治事
 齋者人各
 一事治又
 事と兼民と治
 算數之類如

師説敦尚行實後為大學四方歸之
 庠舎不能容
諸學徒信と以て數
 依て文章六經に傳はる義理と主
 文華とや、疑生の師説と信向して行實と教
 尚かり、後に大學校の官人となりて
 四方の人よりて庠舎せまゝ容れん
 其在
 湖學置經義齋治事齋經義齋者擇
 疏通有器局者居之治事齋者人各
 治一事又兼一事如治民治兵水利
 算數之類其在大學亦然其弟子散
 在四方隨其人賢愚皆循循雅飭其

經史餘師

小學卷之八

其大學に在り
弟千四方に散
在し其人の賢
愚に隨ふ皆循
循して雅飾す
其言談舉止之
に過へ問不し
先生の弟子を
知れぬ其學
者相語て先生
稱する問不
して胡公為
知る可也

言談舉止遇之不問可知為先生弟
子其學者相語稱先生不問可知為

胡公也

曾て湖州に居りて學校の内を經
義齋治事齋と云ふ處にて六經の義

理に疏通し器局あるは經義齋に居り又
の能一事と治一事と兼し其の治事齋に居
るは洪水と云ふ田地に居り又軍兵と治るの
事齋に居り又算數の術に達するの治
事齋に居り又弟子四方に散りて隨ひて居り
法雅飾と云ふ賢愚の差を隨ひて居り又
先生の弟子を知らず又學者の知る可也

明道先生朝に
言て曰天下
風俗と正し
賢才を得て
本為宜先
侍の賢儒及百
執事に禮命
心と兼て推訪
心宜德行充備
て師表為に足
者有其次に為
志學の好材
良行の修者有
延聘敦遣して京
師に奉朝相
與に正學と講明
て俾ふ也宜三

○明道先生言於朝曰治天下以正
風俗得賢才為本宜先禮命近侍賢
儒及百執事悉心推訪有德業充備
足為師表者其次有篤志好學材良
行修者延聘敦遣於京師俾朝夕
相與講明正學先生朝廷に奏し
下と治るの肝要は世

の風俗と正し賢才ある人引擧ぐし其本
弟のりて其れを天子に近習の儒臣執事等
仰せられ禮を以て心と兼て賢者推挙せしめ
次に學問の志向の篤志好學の材良の修
物と敦遣して京師に奉朝相俾朝夕

其道必本於人倫明
 倫之本百物理
 明之明其教
 對自以往其孝
 悌忠信與禮
 樂之周旋其
 誘掖激勵漸摩
 成就之所以之
 道皆節序有其
 要之善擇身
 修之天下之化
 成
 自之至而聖人
 之道之至可其
 學行皆是在中
 者之成德為
 標識明達也

學問の正と善談
 其道必本於人倫明
 乎物理其教自小學灑掃應對以往
 脩其孝悌忠信周旋禮樂其所以誘
 掖激勵漸摩成就之道皆有節序其
 要在於擇善修身至於化成天下自
 鄉人而可至於聖人之道其學行皆
 中於是者為成德取材識明達可進
 於善者使日受其業擇其學明德尊
 者為大學之師次以分教天下之學

善に進可也
 取て日に其業
 受其學明に
 徳者者と擇
 大學之師と為
 使次之に以て天
 下之學に分教
 乎

親義別序信の倫に本づき諸物の理と明らふこと
 前にも述べたる小學の礼樂の周旋
 誘掖激勵漸摩成就と第一として節序あるべ
 しその 服制と善惡を擇と身を修天下と化
 成の外に郷人より聖人も至らぬべしその 標
 識明達して又ハ徳尊學問あさるるものと擇て
 業と授きせ、教すや大學校の師範とせんべし
 くに次に次たるもの者と分つる、天下國々學校に置べし
 擇士入學縣升之州州賓興於大學
 大學聚而教之歲論其賢者能者於
 朝凡選士之法皆以性行端潔居家
 孝悌有廉耻禮讓通明學業曉達治
 道者

州の學校に置べし
 縣の内
 州

孝悌に廉耻禮讓有明々ふ學業に通法道に曉達する者と以て

伊川先生學制と看詳す大槩以為學校ハ禮義相先すの地なり而月之使養之道に非請試と改て課有ハ則學官以て而之之と教更に高下と考

定不尊賢堂と制ハ以て天道德之士と選解頤と鑑以別誘と去繁文と省て以専任と専て以風教と勵て以風教と厚及待賓吏師齋と置觀光の法と立是の如者亦數は條

みくものそんれと賓客の禮を以て京都の大學校へあげ聚て教授し賢徳あるもの才能らるものと論ト撰りたるの法ハ第一に慎行端潔清しく家にありて孝行躬かす禮義謙讓廉直するもの、尤も學業に通明國家と治むるの道に曉達するものと撰り下とく

○伊川先生看詳學制大槩以為學校校禮義相先之地而月使之乎殊非教養之道請改試為課有所未至則學官召而教之更不考定高下制尊賢堂以延天下道德之士鑿解頤以去利誘省繁文以專委任勵行檢以

厚風教及置待賓吏師齋立觀光法如是者亦數十條先生學校の制度と觀の事ハ禮義と懸くすきとるふ當時ハ月試と毎月文章と以て才智と論ト争ふと考て德行と教養の道にあつたり、請へ余と月試と考へるハ學官のふハ教と學問の至る所あるハ學官のふハ教と學問の高下と考へるハ學官のふハ教と學問の高天下道徳ある賢者と尊と京都の學校へ解頤と鑑と別誘と去繁文と省と専任と専て以風教と勵と厚及待賓吏師齋と置觀光の法と立是の如者亦數は條

何れハ人の數と類へざるは、さきより學者の考とあはれて、利祿と以て誘引するハ、時ハ、利と考へるハ、遊ガのハ、親とす、上京とせ、一役と専に委任せらるるハ、教の風儀と厚一行檢と勵すべし、又二つの齋と建置一と待賓

齋とて、徳ありしと實容くして、人へ、吏師
といふ、或人の法とて、さうとて、他と、いかり、又四
の、人、ま、り、學校の、光と、觀と、み、る、禮義と、た、り、
管絃の、音と、き、き、る、聖賢の、儀と、仰、じ、如、是、の、
法と、數、は、條、先、生、
と、く、た、ま、い、し、や、り、

藍田呂氏郷約曰凡同約者德業

相勸過失相規禮俗相交患難相恤

有善則書于籍有過若違約者亦書

之三犯而行罰不悛者絕之

藍田呂氏郷約の、
約に、日、凡、同、約、
の、約、德、業、相、勸、
過、失、相、規、禮、
俗、相、交、患、難、
相、恤、有、善、
則、書、于、籍、
有、過、若、違、
約、者、亦、書、
之、三、犯、
而、行、罰、
不、悛、者、
絶、之、

之、三、犯、而、行、罰、不、悛、者、絶、之、
俗、禮、儀、の、事、又、ハ、患、難、の、事、
と、規、め、ら、れ、る、外、風、
と、行、は、れ、る、不、悛、
之、と、絶、之、

明道先生教人自致知至於知止

誠意至於平天下灑掃應對至於窮

理盡性循循有序病世之學者捨近

而趨遠處下而闕高所以輕自大而

卒無得也

先生の、人、を、教、む、の、法、ハ、事、物、の、
細、る、理、と、我、り、る、理、の、
至、す、て、道、引、し、意、と、識、
平、ら、さ、し、小、學、の、教、
に、人、の、應、判、り、性、命、
の、理、と、窮、盡、し、
と、下、寧、篤、實、に、道、引、
て、循、る、に、次、序、の、
先、生、常、に、當、世、の、
學、者、學、の、行、狀、
を、書、き、
近、と、遠、に、
飛、一、
下、

明道先生教人自致知至於知止
誠意至於平天下灑掃應對至於窮
理盡性循循有序病世之學者捨近
而趨遠處下而闕高所以輕自大而
卒無得也

先生の、人、を、教、む、の、法、ハ、事、物、の、
細、る、理、と、我、り、る、理、の、
至、す、て、道、引、し、意、と、識、
平、ら、さ、し、小、學、の、教、
に、人、の、應、判、り、性、命、
の、理、と、窮、盡、し、
と、下、寧、篤、實、に、道、引、
て、循、る、に、次、序、の、
先、生、常、に、當、世、の、
學、者、學、の、行、狀、
を、書、き、
近、と、遠、に、
飛、一、
下、

見難に處て高場と闕ふものあり、やうはものは
自整薄に高くて率に道徳と得たり、荒生
ふれと癒て右の
あはしくおのり

右實立教

江革少失父獨與母居遭天下亂盜
賊並起革負母逃難備經險阻常採
拾以為養數遇賊或劫欲將去革輒
感動人者賊以是不忍犯之或乃指
避兵之方遂得俱全於難

言辭氣愿款た
かて人との感謝
志と以て之と犯に
恐不感乃兵
と避之方と指
遂に俱に難お
全に得
下邳に轉客て
貧窮裸跣
行傭して以母に
供す身に便する
之物畢く給不
ふなく莫大

火くや死して母げりなり、天下に盗賊並
起し、母は負て難とのされ險阻土地にゆき
かき食物を採拾し養育せしむ、賊徒を
避去し、江革泣哀しく、老母ありて、
辭氣愿款なり、賊徒感心し、犯すの
辭氣愿款なり、賊徒感心し、犯すの
と得と轉客下邳貧窮裸跣行傭以
供母便身之物莫不畢給

○薛包好學篤行父娶後妻而憎包
分出之包日夜號泣不能去至被毆

包不得已廬于舍外日入而灑掃父
 怒又逐之乃廬於里門晨昏不廢積
 歲餘父母慟而還之後服喪過哀
 人學問之驚好之者後母之
 而灑掃也
 廬於里門
 晨昏不廢
 積歲餘
 父母慟而還
 之後服喪過哀

包不能止乃中分其財奴婢引其老
 者曰與我共事久若不能使也由廬
 取其荒頓者曰吾少時所理意所戀
 也器物取其朽敗者曰我素所服食
 身口所安也弟子數破其產輒復賑
 給

能不及其財
 中分其財
 其老若引
 曰我與事共
 能不由廬
 荒頓者取
 曰吾少時
 所理意所
 也器物其
 朽敗者取
 曰我素所
 服食身口
 所安也弟
 子數破其
 產輒復賑
 給

○王祥性孝蚤喪親繼母朱氏不慈

數之譜是由愛父失由愛父失除使祥愈恭除使祥愈恭謹父母疾有謹父母疾有衣帶不解不湯衣帶不解不湯藥必親嘗母藥必親嘗母嘗生魚時嘗生魚時天寒水凍天寒水凍祥衣將剖水祥衣將剖水求之冰忽自解求之冰忽自解雙鯉躍出之雙鯉躍出之持而歸母持而歸母又黃雀多復又黃雀多復思復雀數十思復雀數十有飛其幕入復有飛其幕入復以母供其以母供其

數譜之由是失愛於父。每使掃除牛
下。祥愈恭謹。父母有疾。衣不解帶。湯
藥必親嘗。母嘗欲生魚。時天寒水凍。
祥解衣將剖水求之。冰忽自解。雙鯉
躍出。持之而歸。母又思黃雀。多復有
雀數十。飛入其幕。復以供母。鄉里驚
嘆。以為孝感所致。有丹柰結實。母命
守之。每風雨。祥輒抱樹而泣。其篤孝
純至如此。晉之王祥。少孤。其母嘗病。祥嘗

里驚嘆。以為為孝感所致為孝感所致。丹柰有實丹柰有實。結母命守之結母命守之。每風雨每風雨。祥輒抱樹祥輒抱樹。而泣其而泣其。篤孝純至此篤孝純至此。如如。

里驚嘆。以為常に牛牽の内を掃除して常に牛牽の内を掃除して。父母の疾ありては父母の疾ありては。帯を解いて帯を解いて。湯を嘗む湯を嘗む。母の疾ありては母の疾ありては。魚を嘗む魚を嘗む。天寒水凍天寒水凍。祥衣を解いて祥衣を解いて。水を求む水を求む。氷忽自解氷忽自解。雙鯉躍出雙鯉躍出。持りて母に歸す持りて母に歸す。又黄雀の多し又黄雀の多し。復に雀數十あり復に雀數十あり。飛んで其幕に入り飛んで其幕に入り。復に母に供す復に母に供す。

王褒字偉元父儀魏安東父儀魏安東將軍司馬昭將軍司馬昭司馬為東關之司馬為東關之敗昭衆問敗昭衆問近日之事誰近日之事誰任其咎儀對曰任其咎儀對曰責在元責在元

○王褒字偉元。父儀為魏安東將軍。
司馬昭。司馬東關之敗。昭問於衆曰。
近日之事。誰任其咎。儀對曰。責在元。

經世餘師

小學卷之八

十一

儀對曰曰責元帥在昭怒

帥昭怒曰司馬欲委罪於孤耶遂引

孤に委んと欲す

出斬之王哀の父王儀を以て司馬昭が司馬の

耶遂に引出て

教授三徵七辟皆不就廬于墓側且

哀父の非命を

夕常至墓所拜跪攀栢悲號涕淚著

痛是に於隱居

樹樹爲之枯讀詩至哀哀父母生我

七辟皆不就墓

劬勞未嘗不三復流涕門人受業者

の側に廬して

並廢蓼莪之篇王哀の父の非命に死す

夕常至墓所に

至て拜跪し栢

攀て非心號す

泣涙樹に著て

樹之爲に枯詩

讀て哀哀父母

と讀て哀哀

父母我を生て

劬勞し

郡國より七

未嘗三復して

の墓に廬して且

涕と流下ばあ

相う木にかりて

不門人業者

と生るる劬勞

受者並に蓼莪

の篇と廢蓼莪

之篇と廢蓼莪

家貧躬耕計口

家貧して躬耕

度身而蠶或有

す口と計し而

及司馬氏纂魏

田の蠶を以て

坐以示不臣于

未嘗西に向て

管王哀の貧より

而して坐す木

入下の主と

經史餘評

小學卷之八

十一

（未）漢（手）

晉の西河の人
王延事親色養夏則
色養夏ハ則
枕席と弱スハ
則ラ取リて
温ク陰ハ盛
寒ク隆ハ盛
無ク極シ親
ハ

坐セザリて西の方にあつる也

○晉西河人王延事親色養夏則扇

枕席冬則以身温被隆冬盛寒體常

無全衣而親極滋味王延ハ親に孝ヤリ人

夜とあつる身負ふハ寒氣隆盛一と云ハ

體に全ク衣服とツムハさざりけり

○柳玘曰崔山南昆弟子孫之盛鄉

族罕比山南曾祖王母長孫夫人年

高無齒祖母唐夫人事姑孝每旦櫛

縱笄并於階下即外堂乳其姑長孫

夫人不粒食數年而康寧崔山南昆

孫の唐夫人孝行をばくし崔氏の祖母

婦の恩と報と

病長幼咸萃宣言無以報新婦恩願

新婦有子有孫皆得如新婦孝敬則

崔之門安得不昌大乎崔山南昆

一日疾病

長幼咸萃宣言無以報新婦恩願

婦の恩と報と

無願ハ新婦子

有孫有子有孫皆得如新婦孝敬則

不_レと_レ得_レん_レ乎

婦の我に事ごとくせりせば
崔氏安う大昌とぞくんとせり

南齊の庾黔婁

○南齊庾黔婁妻爲孱陵令到縣未旬

爲孱陵令到縣未旬

父易在家遭疾黔婁忽心驚舉身流

汗即日乘官歸家家人悉驚其忽至

汗即日乘官歸家家人悉驚其忽至

即日官歸家家人悉驚其忽至

南齊の代に、庾黔婁といふ人孱陵といふ所の

驚_レく_レ未_レに_レ也

時易疾始二日醫云欲知差劇但當

時易疾始二日醫云欲知差劇但當

時易疾始二日醫云欲知差劇但當

二日_レ易_レ疾_レ始_レて

其甜苦易泄利黔婁輒取嘗之味轉

其甜苦易泄利黔婁輒取嘗之味轉

其甜苦易泄利黔婁輒取嘗之味轉

以身代_レ也

以身代_レ也

以身代_レ也

以身代_レ也

海虞令何子平

○海虞令何子平以喪去官哀毀踰

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

禮每哭踊頓絕方纒屬大明末東土

號哭して常に祖
括之日の如く
潔と衣不夏
清涼に就不

為葺理子平不肯曰我情事未申天
地一罪人耳屋何宜覆

日に米數分と以
粥に為盛米と
進不居所屋敗
て風日と蔽不兄

年中に東土饑饉カクニシレシトモウク
振つし繼て八
夜號哭して喪
祖括髪するの禮儀あり冬ノ繁臘をモテ夏ノ清

の子伯興為葺
理を欲子平
不肯不曰我情
事未申未天地

京にわろす。一日に粥す。野菜と食セテ。屋やぶれ雨風
より鹽とかり。野菜と食セテ。屋やぶれ雨風
も蔽まり。兄弟子の伯興と云く。子平の葺理ん

何宜覆宜ケン
未宜二城
蔡興宗會稽

情事未申未天地の罪人。蔡興
宗為會稽太守其加祿賞為營塚擴

為に塚擴と
蔡興宗會稽
の守と為其

○朱壽昌生七歲父守雍出其母劉
氏嫁民間母子不相知者五十年壽

朱壽昌生七
歲父守雍
守其母劉氏

昌行四方求之不已飲食罕御酒肉
與人言輒流涕

五十年壽昌四
方之行之と求
て已不飲食酒

與人言輒流涕

肉と御と罕
與人言と流
輒ら涕と流

熙寧初棄
官入秦與家人訣誓不見母不復還

熙寧の初官と
棄秦に人家人
與訣に誓母に

行次同州得焉劉氏時年七十餘矣

得_レ。劉氏時に
年七_レは餘_レ雍_レ
守_レ錢明逸_レ事_レ
以_レ聞_レす。壽昌_レ
詔_レりて還_レて官_レ
就_レは是_レに歸_レて天_レ
下_レ皆_レ其_レ孝_レと知_レ
焉_レ矣_レ。

壽昌_レ再_レ郡_レ守_レ
為_レ是_レに至_レて母_レ
の友_レと以_レて河_レ中_レ
府_レに通_レ判_レす。其_レ
同_レ母_レの弟_レ妹_レと迎_レ
て大_レ歸_レ居_レと敷_レ
其_レ母_レ卒_レす。涕_レ
泣_レて幾_レ明_レと喪_レ
其_レ宗_レ族_レと

拊_レ其_レ宗_レ族_レに於_レて
居_レ其_レ宗_レ族_レに於_レて
亦_レも恩_レ音_レと盡_レす。
兄_レ妹_レ之_レ孤_レ女_レ二人_レ
と嫁_レす。其_レ葬_レし
能_レ不_レ者_レと甚_レし
十_レ餘_レ喪_レ蓋_レ其_レ天_レ
性_レ此_レの如_レ。

伊_レ川_レ先生_レの家_レ
喪_レと用_レ不_レ淨_レ屠_レ
と用_レ不_レ淨_レ屠_レ
と用_レ不_レ淨_レ屠_レ
家_レ之_レに化_レする有_レ
霍_レ光_レ林_レ禁_レ闈_レ出_レ
入_レす。二十_レ餘_レ年_レ
心_レと小_レて謹_レ慎_レす。

經典餘師

小學卷之八

十六

雍_レ守_レ錢明逸_レ以_レ事_レ聞_レ詔_レ壽昌_レ還_レ就_レ官_レ
錄_レ是_レ天_レ下_レ皆_レ知_レ其_レ孝_レ。熙_レ寧_レ年_レ中_レ官_レ祿_レと
す。其_レ泰_レの國_レへ中_レて

七十_レ餘_レ年_レ。大_レ守_レ錢明_レと人_レ朝_レ廷_レの_レ上_レ聞_レに
た_レり。壽_レ昌_レへ_レく_レりて本_レの_レ官_レに_レ就_レは_レ天_レ下_レの_レ人_レ々_レ
の_レ孝_レ行_レと。壽_レ昌_レ再_レ爲_レ郡_レ守_レ至_レ是_レ以_レ母_レ故_レ
の_レ孝_レ行_レと。壽_レ昌_レ再_レ爲_レ郡_レ守_レ至_レ是_レ以_レ母_レ故_レ

通_レ判_レ河_レ中_レ府_レ迎_レ其_レ同_レ母_レ弟_レ妹_レ以_レ歸_レ居_レ
數_レ歲_レ母_レ卒_レ涕_レ泣_レ幾_レ喪_レ明_レ拊_レ其_レ弟_レ妹_レ益_レ
篤_レ爲_レ買_レ田_レ宅_レ居_レ之_レ其_レ於_レ宗_レ族_レ尤_レ盡_レ恩_レ
意_レ嫁_レ兄_レ弟_レ之_レ孤_レ女_レ二人_レ葬_レ其_レ不_レ能_レ葬_レ

者_レ十_レ餘_レ喪_レ蓋_レ其_レ天_レ下_レ如_レ此_レ。其_レ母_レの_レ故_レ
に_レ河_レ中_レの_レ大_レ守_レの_レ代_レ役_レと_レな_レり_レ依_レて_レ母_レの_レ弟_レ
妹_レと_レは_レれ_レう_レ多_レり_レその_レち_レに_レ母_レす_レぎ_レら_レう_レな_レあ_レま_レり_レの_レ泣_レ
に_レ明_レと_レ喪_レえ_レん_レと_レし_レける_レ依_レて_レ弟_レ妹_レ拊_レ撫_レす_レ
あ_レや_レ殊_レに_レう_レつ_レり_レ多_レり_レ田_レ宅_レと_レり_レ宗_レ族_レと_レ恩_レ惠_レ
す_レて_レ兄_レ弟_レの_レ子_レに_レ孤_レ女_レ二人_レあ_レん_レと_レし_レける_レ嫁_レに_レ
け_レら_レり_レ又_レ葬_レ禮_レの_レつ_レと_レさ_レら_レん_レ葬_レ禮_レい_レら_レり_レも_レ多_レ
し_レ天_レ性_レい_レら_レん_レに_レく_レの_レ
と_レく_レな_レり_レと_レあり_レ。

伊_レ川_レ先生_レ家_レ治_レ喪_レ不_レ用_レ淨_レ屠_レ在_レ洛_レ
亦_レ有_レ一_レ二_レ人_レ家_レ化_レ之_レ。伊_レ川_レ先生_レの家_レ喪_レと
用_レ不_レ淨_レ屠_レ在_レ洛_レ
亦_レ有_レ一_レ二_レ人_レ家_レ化_レ之_レ。

霍_レ光_レ出_レ入_レ禁_レ闈_レ二十_レ餘_レ年_レ小_レ心_レ謹_レ
心_レと小_レて謹_レ慎_レす。

霍_レ光_レ林_レ禁_レ闈_レ出_レ入_レす。二十_レ餘_レ年_レ小_レ心_レ謹_レ
心_レと小_レて謹_レ慎_レす。

霍_レ光_レ林_レ禁_レ闈_レ出_レ入_レす。二十_レ餘_レ年_レ小_レ心_レ謹_レ
心_レと小_レて謹_レ慎_レす。

霍_レ光_レ林_レ禁_レ闈_レ出_レ入_レす。二十_レ餘_レ年_レ小_レ心_レ謹_レ
心_レと小_レて謹_レ慎_レす。

經典餘師

小學卷之八

十六

未嘗過有未
人として沈靜詳
審なり。出入毎に
殿門と下。進止
常處有即僕射
竊に識し之を
視に尺寸と失
不(未)二渡

汲黯景帝の時
太子洗馬と為嚴
と以て憚る見る
武帝位に即て
視に上爵都尉と
為數直諫と以
久く位に居る
得不足時太后
の弟武安侯田

蚡丞相と為
蚡と為非
蚡に見て未嘗
拜と未之と揖す
未二渡

上方に文學の
儒者と招上曰
五言云云欲す
黯對曰陛下下
内欲多し而し
外仁義を施す。
奈何唐虞之
治に效んと欲す乎。
上怒心色と變て

慎未嘗有過為人沈靜詳審每出入
下殿門進止有常處即僕射竊識視
之不失尺寸霍光禁闈と出入するに二十
即僕射のめれなり所のにめちつて
視に尺寸のちひなりとさうり

汲黯景帝時爲太子洗馬以嚴見
憚武帝即位召爲主爵都尉以數直
諫不得久居位是時太后弟武安侯
田蚡爲丞相中二千石拜謁蚡弗爲

禮黯見蚡未嘗拜揖之漢の汲黯ハ太
子の生つて嚴重と人々憚りける太子位に
即て直なる諫言たびくく久く都尉居る
しよりこの時天子の太后の弟武安侯田蚡
相なり公卿の衆ハ俸祿の數を以て中二稅
石とぬづけり。右の衆中田蚡にのみ拜して
譏たり去るれども田蚡ハ禮を受て汲黯ハはるか

上方招文學儒者上曰吾
欲云云黯對曰陛下内多欲而外施
仁義奈何欲效唐虞之治乎上怒變
色而罷朝公卿皆爲黯懼上退謂人
曰甚矣汲黯之戇也羣臣或數黯黯

而て朝と罷公卿皆黜る為に懼るは退して人に謂て曰。甚しい。汲黯之黜。羣臣或ハ黜とて數黜曰。天子公卿輔弼之臣。置。寧。從。諛。して意と兼。十。不。義。に陷れ。愛。ま。も。朝。廷。と。厚。と。奈。何。

黜病多。病且。三月に滿日ハ。常。に。止。日。を。賜。都。數。す。終。に。瑜。不。最。後。に。嚴。助。為。に。請。告。上。曰。汲。黯。ハ。何。如。人。也。曰。使。黯。任。職。居。官。亡。以。瑜。也。曰。黯。と。して。職。を。任。官。に。居。使。以。人。に。瑜。と。亡。然。と。も。其。主。と。輔。て。成。と。事。に。主。て。ハ。自。謂。實。育。雖。奪。と。能。弗。也。上。曰。然。古。に。社。稷。之。臣。有。汲。黯。如。之。近。臣。ハ。之。に。近。臣。ハ。成。

天子置公卿輔弼之臣。寧令從諛。承意陷主於不義乎。且已在其位。縱愛身奈辱朝廷何。政務を論。汲黯に云云。天子公卿輔弼之臣。置。寧。從。諛。して意と兼。十。不。義。に陷れ。愛。ま。も。朝。廷。と。厚。と。奈。何。

曰天子置公卿輔弼之臣。寧令從諛。承意陷主於不義乎。且已在其位。縱愛身奈辱朝廷何。政務を論。汲黯に云云。天子公卿輔弼之臣。置。寧。從。諛。して意と兼。十。不。義。に陷れ。愛。ま。も。朝。廷。と。厚。と。奈。何。

終不瑜。最後嚴助為請告。上曰。汲黯何如人也。曰。使黯任職居官。亡以瑜。入然至。其輔少主守成。雖自謂實育。弗能奪也。上曰。然古有社稷之臣。主如汲黯。近之矣。汲黯常に病あり。三月に滿日ハ。常。に。止。日。を。賜。都。數。す。終。に。瑜。不。最。後。に。嚴。助。為。に。請。告。上。曰。汲。黯。ハ。何。如。人。也。曰。使。黯。任。職。居。官。亡。以。瑜。也。曰。黯。と。して。職。を。任。官。に。居。使。以。人。に。瑜。と。亡。然。と。も。其。主。と。輔。て。成。と。事。に。主。て。ハ。自。謂。實。育。雖。奪。と。能。弗。也。上。曰。然。古。に。社。稷。之。臣。有。汲。黯。如。之。近。臣。ハ。之。に。近。臣。ハ。成。

大將軍青侍中

に侍す。上、厠に

踏して之に視、

相弘、宴見す。

或時、冠を不

冠して不見也。

上嘗武帳に坐

黯前、事と

奏す。上冠せ不

黯望見、帷中

に避入り、其奏

と可と使、其敬

禮と見、此の

如

初魏遼東公

翟黑子、有寵

於太武

初魏遼東公

翟黑子、有寵

於太武

つみなり、むら、社稷の守りなり、臣といふつへ

一ハかれ、大將軍青侍中、上、厠

視之、丞相弘、宴見、上、或時、不冠、至如

見黯、不冠、不見也、上嘗坐武帳、黯前

奏事、上不冠、望見黯、避帷中、使人可

其奏、其見敬禮如此、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

しく、視、黯、望見、帷中、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

に避入り、其奏、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

と可と使、其敬、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

禮と見、此の、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

如、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

初魏遼東公、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

翟黑子、有寵、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

於太武、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

初魏遼東公、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

翟黑子、有寵、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

於太武、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

初魏遼東公、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

翟黑子、有寵、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

於太武、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

初魏遼東公、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

翟黑子、有寵、黯、大將軍の衛青とて、厠傍に表踞

初魏遼東公

翟黑子、有寵

於太武

初魏遼東公

翟黑子、有寵

於太武

公孫實曰若首實セバ罪測可
不。如不姑く之
と識る黒子
と死して日君奈何
てう人と謀て死
地に就む入て帝
に見て實と以て
對不帝怒して
と殺す。當二漢

帝允として太子
に經を授使崔
浩史の事と以て
收被に及ぶ太
子允に謂く

入て至尊に
吾自卿と導する
脱至尊問有バ
但吾語に依

太子帝に思て
言。高允心と
心て慎密なり。
且微賤う。制
崔浩に由請其
死と林帝允と
死で問く日國
書皆浩が為所
乎對曰臣浩

殺之

初ハ文章の所ハ
魏の大武帝の寵愛
ありたる公孫實と
いふ布千匹と納け
著作郎高允に相謀
り實を以て告げや
ハ公は唯唯の寵愛
らハ首實するべし
欺問するべし
諱ハハ人死地に就
帝に思ひく實事と
授太子經及崔浩以
謂允曰入見至尊吾
自導卿脱至尊

有問但依吾語

崔浩と人史記と
と善惡の善惡なり
聞く史官の邪意
高允に於てハ
太子見帝言高允
微賤制由崔浩請
赦其死帝召允問
曰國書皆浩所為
乎對曰臣與浩共
為之然浩所領事
多總裁而已至於
著述臣多於浩帝
怒曰允罪甚於浩

與共之之為り
然も浩を領する
所の事多し總裁
而已著述に至
て臣浩より多
帝怒て曰。允が
罪浩より甚し
何と以て生しと
得。太子懼て曰。
天威嚴重なり
允ハ小臣迷亂
次と失耳。臣鼻
に問。皆云浩が
為所（於）

帝允に問。許に
東宮の言所の
如半對て曰く

臣が罪當に族
と滅する當。敢虚
妄セ不。殿下。臣
が侍講日久きと
以て臣と哀て其
生と巧し欲耳。
實ハ臣に問。不
臣亦此言無
敢迷亂セ不。帝
顧て太子
謂て曰。直する
哉。是人情の
難する所なり。
而も允能之と
為死に臨て辭
と易不。信也
臣が為君と欺
不ハ負也。宜

何以得生。太子懼曰。天威嚴重。允小
臣迷亂。失次耳。臣鼻問。皆云浩所為

太子奏して帝にあらせらるる高允の
ハ心と小して慎密ゆるするの
ろのこの制ハ二崔浩ヤんまうれハ死罪と藏
ナハ一とさうとを帝依て高允より問すハ魏
國の史記ハ崔浩の為ヤ一とアヤ高允とス
ハ崔浩と臣とヤ一とアヤ浩ガ領するハ崩後
の總裁ハヨウヤ一著述一ハ崔浩より臣ガソ
多クヨリトクハ帝ヨウヤ一高允ガ罪崔浩より
多クヨリトクハ太子懼ハ又のトクハ
太子威光の嚴重にヤ一とスハ小ハ官人の高
允にハアハ一とスハ一とスハ一とスハ一とスハ
臣ヨウヤ一とスハ一とスハ一とスハ一とスハ
帝問允信

如東宮所言乎。對曰。臣罪當滅族。不
敢虚妄。殿下。以臣侍講日久。哀臣欲
巧其生耳。實不問臣。臣亦無此言。不
敢迷亂。帝顧謂太子曰。直哉。此人情
所難。而允能為之。臨死不易辭。信也。
為臣不欺君。貞也。宜特除其罪。以旌
之。遂赦之。

帝又高允に問。太子實に東宮の
言のヨリヤ一ヤ一高允ハアハ一とスハ
ヤ一臣ガ此ハ一とスハ一とスハ一とスハ
ハ一とスハ一とスハ一とスハ一とスハ
侯臣ハ一とスハ一とスハ一とスハ一とスハ
ハ一とスハ一とスハ一とスハ一とスハ

特に其罪を
除て以之と旌
官遂に之と赦
當宜に之と

他日太子允と
議曰く吾卿ハ
為に死と脱と
乞ふ欲する而
卿従ふ不ハ何
也名曰臣崔
浩與實に史の
事と同一死生
榮辱義獨殊
殿下再造之

慈と憐心に違
臣が願に非
也太子容に動
て稱歎すハ
退て人に謂て
曰我東宮の指
導と奉不者翟
黒子に負て恐
故也

李君行先生
名潜慶州の
人京師に入
泗州に至
留止す其子弟
先往と請君行

あつてくくあり、實ハ臣に
やふくも、詩くも、知て心
を帝られんきくや、太子
に正直やうよ、人情の
高、能為か、只今死するに
辭と易さるハ信やう、主
罪と除て名と旌すべし、
うて遂に赦さるし、

曰吾欲為卿脱死而卿不從何也允
曰臣與崔浩實同史事死生榮辱義
無獨殊誠荷殿下再造之慈違心苟
免非臣所願也太子動容稱歎允退
謂人曰我不奉東宮指導者恐負翟

黒子故也
他日太子高允と議たすハ、
何ハ、臣と崔浩と史記と同一
事たり、まこれハ生死と榮辱と下出
慈愛ハ、荷ひ、違て、以て免
動容て稱歎すハ、高允これより退
うり、て死と恐る、誠ハ、
に、負、

○李君行先生名潜慶州人入京師
至泗州留止其子弟請先往君行問
其故曰科場近欲先至京師貫開封

其故と問曰科
場進止心が師に
至開封の戸籍
に貫て應と取ん
欲

君行許不して
曰汝虔州の人
而に開封の籍
に貫て君に事
を求む欲

而先君と欺可
せん乎寧遲緩
數年と行可
く不也

崔玄暉母盧氏
嘗誠玄暉曰吾見

田郎中執効
馭に見て曰兒
子官に從者人
有來て云貧乏
ありて存す可
能不此是好消
息貴貨充て足
衣馬輕肥云々
聞若くバ此惡
消息と吾嘗て
以て確論と為

比親表中の
仕宦者將と見
に錢物と將て
其父母に悦
父母但喜悅する

戸籍取應

宋の李君行先在京師にありて
其故と問れバ京師の科場の科
に貫て問れバ京師の科場の科
に貫て問れバ京師の科場の科

君行不許曰汝虔州
人而貫開封戸籍欲求事君而先欺

君可乎寧遲緩數年不可行也
先生曰汝虔州の人而貫開封戸籍に

崔玄暉母盧氏嘗誠玄暉曰吾見
田郎中執効馭に見て曰兒子官に從者人

者有人來云貧乏不能存此是好消
息若聞貴貨充足衣馬輕肥此惡消

息吾嘗以為確論
崔玄暉母盧氏嘗誠玄暉曰吾見

比見親表中仕宦者將錢物上其父
母父母但知喜悅竟不問此物從何

其故と問曰科場進止心が師に至開封の戸籍に貫て應と取ん欲

此物何物... 而來必是祿俸餘資... 誠亦善事如其... 非理所得此與盜賊何別... 縱無大咎... 獨不內愧於心... 玄暉遵奉教誠以清... 謹見稱... 又同所... 親表中... 仕官... 父母... 進上... 但... 滋味... 祿俸... 餘資... くら... 誠に善事... 悲理... 盜賊... くら... の... 教誠と... 遵奉... 以て稱... 劉器之待制初... 同年與... 張觀... 參政に...

而來必是祿俸餘資。誠亦善事。如其
非理所得。此與盜賊何別。縱無大咎。
獨不內愧於心。玄暉遵奉教誠以清
謹見稱。又同所。親表中。仕官。父母。
進上。但。滋味。祿俸。餘資。くら。
くら。誠に善事。悲理。盜賊。くら。
くら。の。教誠と。遵奉。以て稱。
劉器之待制初。同年與。張觀。參政に。

人同身と起... 教と請... 某官とす... 以來常に四... 勤謹和緩... 中間の後生... 聲に應じて日... 勤謹和緩... 命と聞... 一字の所未聞... 不所... 張... 色と正し氣と... 作て日... 賢に... 及不... 世間... 錯...

自守官以來常持四字勤謹和緩中
間一後生應聲曰勤謹和既聞命矣
緩之一字某所未聞張正色作氣曰
何嘗教賢緩不及事曰道世間此事
不因忙後錯了待制の... 劉器
張觀... 二人の... 三人... 張觀... 賢事に... 錯...

伊川先生の
曰安定之門人
往往古と替
民と愛とと知
則ら政とと為
於何有矣也

○伊川先生曰安定之門人往往知
替古愛民矣則於為政也何有伊川

呂榮公自
必守處未嘗
人舉

呂榮公自必守處未嘗于人舉

其子舜從
守官會替人
或議其不

其子舜從守官會替人或議其不

求知者
舜從對曰勤
於職事其他不

求知者舜從對曰勤於職事其他不

不慎乃
所以求知也

不慎乃所以求知也

勤其他也
敢不慎乃所
以求知也

勤其他也敢不慎乃所以求知也

乃知ん
求る所以也

乃知ん求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

求る所以也

小學卷之八終

